
~ 黄泉路の罪咎 ~

白狐魔丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜黄泉路の罪咎〜

【Nコード】

N6887N

【作者名】

白狐魔丸

【あらすじ】

激しい豪雨が天を覆い尽くす夜。

高校二年生である天津傘光熙あまつかひこうせいは、謎の男によって、とあるゲームへと誘われてしまう。目が覚めると、そこは真つ暗な一室。途端、奇怪な悲鳴が聞こえ、怯えて外に出てみれば、そこには《音楽室》という文字が……。

ここは、学校だ。

そう気付き、すぐさま校舎から出ようとするものの、玄関には、奇怪な声の正体が。その姿を見るや否や、階段を駆け上がり、理科

準備室へと逃げ込む。

脱力し、全てがどうでもよくなり、自棄になるも、生き残りたいという本能のまま、武器を探し求め、再び奇怪の正体へ立ち向かう。見事脱出を果たした光熙ではあるが、そこにはなんと、また奇怪の正体が。

完全な敗北を覚えた主人公は、その場に倒れる。

しかし、気を失う寸前、彼の前に謎の二人組が現れる。

静寂と混乱と「口霊」と……（前書き）

どうも、初めまして。sirouikitune1改めまして、アヴェントと申します。

（関連性の無いニックネームとかのツッコミはご勘弁を）

この小説はメジャーである、学園物ファンタジーというジャンルに属しています。

お見苦しい処も多々あるでしょうが、どうか御了承下さい^^；

静寂と混乱と亡霊と……

午後八時まで……後、一分五十三秒。

「もうそろそろか……」

長身の男は、夜風と雨音が打ち付けられる窓辺に腰を掛ける。冷たい冷気が背中に沁みてくるが、男はそれを心地よく思い、頬を吊り上げる。

空はどんよりと曇り、時間に相応しい夜空さえ怯えるほど暗闇を広げていた。それに呼応するように、雨は激しさを増していく。

真つ暗な一室には、無数の段ボールが、雑に積み上げられていた。部屋主の所有物と思われる、テレビ、観葉植物、グラウンドピアノへ襲い掛からんと言っばかりに。その中で、ふと、不気味で苦しそうな呻き声が、とある隅の段ボールから聞こえてきた……。

幽霊か？ それとも妖怪か？ この状況で聞けば、誰もがそんな不安を感じるだろう。しかし、男はその笑みを止める事は無かった。そう、三十秒くらい経っただろうか。冷たいシン……とした空気の中、男は遂に、その足を進めた……。行く先は、そう……その声の主へ。

「小さき命よ。どうだ、感想は？」

移動した男の姿が、ぼんやりと闇に浮かぶ。七割の前髪をオールバックで纏め、インテリ眼鏡を掛けた男。見るからに、何処かの奇術師のような恰好の男は、まるで、自分が神様だと言うような態度で、声を発する。

「……感想？ 何……だよ、それ」

男の目線には、身体を震わせながら答える少年。まだ、十七歳くらいだろうか……。整った顔立ちに、高校生それなりの体型。飾り気の無い外見は地味に見えるが、それも彼の魅力と思う者もいるだろう。成績優秀、文武両道、完璧人間。少年の際立つ特徴は、それらを感じさせる気品を放っている。だが、今回だけは違った。

艶のある黒髪は乱れ、呼吸は不安定。何よりその目には、余裕が無い。

声を出す事すら苦しい少年は、座り込みながら、頭を押さえ付ける。

「ここは、どこだよ……。誰だよ……。お前っ！」

そう叫ぶ少年を、男は怪訝な顔で見つめる。

「……記憶障害か。……まあ、いい。これですぐに……」

すると、男は懐に手を伸ばし、何かをゆっくりと取り出す……。

「っ!？」

赤い手紙。暗さでよく見えなくても、少年の目にははっきりと映っていた。途端、身を削られるような頭痛に襲われる。

「う、……。あ」

頭を押さえ付けている手に、より一層力が増す。男は嘲笑いながら、その様子を眺めた。

「招待状に、サイン……。貴様のだ」

その瞬間、少年は獲物に食いつく勢いで、自分の手を手紙へと伸ばす。しかし、

「あがつ!？」

突然、腹部が激痛に襲われた。何かお腹に喰い込んでくるような痛み。少年はそれでも構わず赤い手紙を奪おうとしたが……。男は優越な顔でその手紙を持ち上げる。

「なるほどな……。やはり、身体は憶えていたか。まったく……。世話を焼かせる。参加者だというのに、説明をする暇が無くなってしまったじゃないか」

残念がる事無く、満足気に語る男を、少年は腹を抑えながら憎んだ。その間も、頭痛は止まず、そこから何かか押し寄せてくるが、それが何なのか理解ができない。

男は右手首に巻いた時計を確認する。

「後……十秒」

ぎくり、と。少年の顔は青ざめた。この世の終焉を見たかのような、

失望感溢れる表情。本能的にやばいと感じ、脱力した四肢を駆使して、謎の男に突っ掛かる。

「や、やめ……ろおっ！」

苦しみながら訴える少年を無視して、男はカウントを確認する。

「六、五、四……」

三秒まで迫ったその時、男はカウントを止め、少年へ何かを放り捨てる。そして、闇に溶け込むような声で告げた。

「安心するがいい。もちろん、この？ゲーム？で生き残れた暁には」

そこで男の言葉がフツと途切れた　いや、掻き消された。

「ああああああああああ！」

どこからか、化け物染みた声に。

「う、ああああああ！」

少年は、恐怖に怯えながら逃げた。

あの奇声が聞こえる度に、押し寄せてくる何かが、更に迫ってくる。

男から投げられた箱を手に、息切れしながらもこの部屋の出口へと走る。ドアノブに手を掛け、焦りながらその身を奥の回廊へと進める。

「あ……れ？」

広がる景色には、何処か見覚えがある……。その時、少年はやっと気付いた。馴染みのある空間に、頭が冴えてくる。

「ここって……もしかして……」

後ろを振り向く　そのドアには、こう書かれていた。

《音楽室》と。

「そんな……嘘だ、ろ……？」

不意に。少年の頭の中で迫っていた何か　記憶が、蘇った。

そう、今日の放課後の事だ。

少年　天津傘光熙あまじかこうきは、いつも通り普通に登校した。通学路を通

り、校門を抜けて、学校の下駄箱を開ける。そこまでは、普段通り。何事も無く、退屈しながら、地を見つめる毎日。

そして、事態は起きた。

上履きを手に取るうとした瞬間、指先に何か変な違和感を感じた。誰かの悪戯だろうか、と周囲を見渡す。誰の目線も感じられず、あるのはただ、高鳴る心臓の鼓動だけ。しかし、これは余りにも不自然だった。天津傘光熙は性格上からか、人付き合いが苦手であり、声を掛けられても会釈程度しか返事をした事が無い。そのため、交友関係が薄く、特に虐められるという事も無く、空気のような生活を送っていた。

視線や好奇心は感じるが、誰も近づかない。そんな自分を、まるで展示物のような存在だと自覚している。

しかし、今現在……自分の下駄箱に、何かがある……。

光熙は疑いと同時に現れた、好奇心の赴くままに、下駄箱の中へ顔を覗かせる。すると、中には一通の赤い手紙が入っていた。真っ赤に染め上げられたその手紙は、妖しい匂いを漂わせ、そこにポツンと置かれていたのだ。

触るなど、危険だと、脳が瞬時に判断する。だが、光熙は真っ赤な手紙を見つめながら、その脳の言葉を無視した。

自分の下駄箱の中に、不気味な色を放つ手紙が入っている……。いつもと何ら変わりの無い日常で、こんな身震いする変化が起きた。目の前には手紙。内にあるのは欲求。

この状況に、心底怯え 同時に興味を注がれた。

「そっだ……。そっだっだ」

光熙はぼんやりと浮かんでくる頭の映像を捉え、次々と記憶として繋いでいく。

「あの後、俺はあの手紙を持って、教室に入って……。放課後になつてから手紙の内容を読んで……。それで……。あの男が現れた後……。……駄目だ」

溢れんばかりに思い浮かぶ映像は、所々虫食い状態だった。ぽっかりと空いた空間には、何も視えず、ただただイラつきを大きくするだけ。

この記憶をしつかり復元したい、そして今の俺の現状を知りたい
そう思った光熙だったが、

「あああ……ああああああああ！」

そんな余裕は許されなかった。震える奇声、震える空気、震える膝。

再び、あのおぞましい声が耳を突き抜け、鼓膜へと振動する。現実へと意識を戻した光熙は、ただ怯え……本能のままに、その場から走り去る事しかできなかった。

「な、何なんだよ……。一体なんだって言うんだ……!?!」

不安を胸に、全力でその場を離れる。その間も雨風は追い立てるように鳴り響き、恐怖心を煽ってくる。足はよろめき、息は小刻みに、見えない希望にすがりたい気持ちで走って、走って、走り続ける。その時、周りの空気と景色に、今までとは違う馴染みを感じた。今までの勢いを殺しながら、その違和感に顔を上げる。そこには、自分のクラスが……二年D組を示す看板が居座っていた。途端に、全身から何もかもサツと引き抜かれる。

あの場所では、変わらぬ授業が、いつまでも続けられてきた。

この場所では、いつも通りの日常が、行われてきた。

ここでは、俺の求める人生が、送られてきた。

僅かな希望に魅せられ、微かな可能性が見え、光熙の足は、止まった。

「……そうだ、そうだよな。これは夢だ！」

強い言葉の裏には動揺が現れ、見開いた瞳には虚構が渦巻く。

「こんな夢に決まってる！　こんな現実離れした事があってたまるかよ。今からさっさと帰って、風呂に入って、ベッドで寝ればこ
んなの全部……っ！」

「あああああああああああああ」

まるで拒絶するように、恐怖の元凶が発した奇声。

光熙の戯言は一瞬にして消し去られ、しかし、その声は、光熙の今の立場を的確に示していた。

鬼ごっこで例えるなら……敵は鬼で、自分は子。その事に気付いた光熙はすぐに正気を取り戻し、次に取るべき行動が見つかったそう、ただひたすら逃げる事だ。

「っ……くそぉ！」

悪態をつきながら突っ走り、近くにあった階段を下りていく。

（とりあえず、早くここから出よう。あの男が何者なのか、この声は何なのか……そんなのどうだっていい。こんな所に居ても、何も分からない！ 立ち止まらずに、逃げるしかない！） 息苦しくて溜まらない胸を、青い学生服の上から抑える。階段を下りる足を速め、進むペースを上げていく。

後、少し……！ そう思いながら、遂にその足が一階に到達する。そのまま顔を上げ玄関に向かって走ろうとした時

「っ………！」

絶句した。

なんだ……あれ。

ゾクツと背筋が凍る中、光熙の足は一步、また一步と後退していき。静寂と化した玄関前には、窓辺に波打つ雨音と、嘲笑う風の音けれど、一番鼓膜まで浸透してくる音は……ここまで、何度も聞いたあの奇声。いや、濁声。

「「あ、あ、あ………」」

その中空には、黒い布切れが浮いている。

「し………」

その上空には、湾曲した刃が鈍く光っている。

「しに………がみ………？」

足の無いその死は、その問いに答えるかのように、ゆっくりとこちらを向いた。

「うっ、あああああぁー！」

じつくり眺める暇は無い。考えている余裕も無い。ただ、あの絵に描いたような死神から、一目散に逃げようと必死に足を動かした。苦しい、痛い、疲れた、倒れそう……。しかし、それでも足は止めない。なによりも一番強い思いは、怖いという感情だから。

階段を上って二階に到達後、すぐさま向きを替え、廊下を突き抜ける。気が付けば、すぐそこに理科準備室が見える。迷っている暇は無い。

「つく、早くっ！」

右手を伸ばし、ドアノブを回して、室内へと倒れ込む。

「あぐっ……」

身体を強打するが、痛がる事よりも、次の行動の方が大事だった。倒れた身体を瞬時に立ち上げ、開きっぱなしのドアを勢いよく閉める。そして、慌てながらも慎重に、そのドアの鍵を閉めた。

「っはあ！ っはあ！ っはあ、があっは……。ごほおっ……」

ゆっくりと身体を横へ、大の字に寝転ぶ。

頭は真っ白に染まり、目は真っ黒に囚われ、何もかも投げ出したくなる。

もう、寝てしまおうか……。光熙の頭に気持ちが悪く響く。だが、心はそれを許さず、脳を動かせと意志を奮い立たせる。

ここで寝たら、俺は死ぬ。ここで諦めたら、俺は殺される。

光熙は上半身だけを、両手を後ろに徐々に上げていく。辺りには実験器具と段ボール、そして今ではもう微塵の不気味さも感じない人体模型。幸いにも、あの死神の姿は無かった。

考える事はそう……。これからどうするか。光熙にとって、それは命の選択に等しく、非常に厳しい事だった。

まず、ここは学校であり、ここには、あの死神と天津傘光熙しかないだろう。それが、光熙自身の見解だった。死神のいた場所にあった、玄関の窓は、ほとんどが割られ、雨風が流れ込んでいた。あれだけ破壊されて、宿直室に居る教師はともかく、巡回している警備員が気付かないという事は無いだろう。第一、この状況をどう

説明すればいいのやら、それすら思い浮かばない。

包めて結論を言えば、「助けは無い」。

あのふざけた謎の男は、これを？ゲーム？と言っていた。？ゲーム？というからには、こちらに勝利条件があり、それを満たせばゲームクリア。つまり、生きて帰れる。

だが……、と光熙は表情を厳しくする。

脱出するにも、どうする？ このまま出て行けば、間違い無く殺されるだろう。あの鋭利な鎌に。もちろん、生身で太刀打ちできる勇気など微塵も無い。

「真正面から戦う必要は無いんだ……。せめて……せめて何か武器があれば……」

その時、武器？ と、何かが閃いた表情をする光熙。すると、そわそわしながら辺りを見渡し始める。そして、ようやくその目に目当ての物を見つけた。

「あつた……。これだ！」

そう、ゲーム開始寸前に渡された箱。中はずっしりと何か詰まっております。武器という言葉の重さが表れるようだ。早速包装を剥がすと、中から小型のアタッシュケースが見えた。ごくり、と喉を鳴らしながら、ゆっくりと箱を開けていく。そこには、

「これは……拳銃と……、爆弾っ!？」

驚いた。それ以上でも、それ以下でも無く、光熙はただ、驚いた。夜の中でも艶を失わない拳銃は、闇よりも黒く光り、その強固な外見は、殺人兵器の恐ろしさを小さく物語っている。手に取ると意外と重く、しかしその重量に納得する。

爆弾は……外見で分かった。映画とかでよく見るそれは、恐らく時限爆弾。タイマーから伸びた線は、四角い本体の中へと伸びている。だが、結局そこまでだった。

「これ……どうすれば、いいんだ……?」

光熙は当然、この二つを直に見たのは初めてであり、使い方はもちろん、どう準備すればいいのかすら、分からない。正に、宝の持

ち腐れだった。

くそっ！ と光熙は拳銃を叩き付けた。やり切れない感情のまま、爆弾を睨みつける。

スイッチのある場所は幾つか見当が付く。だが、？時間制限付き？という事も含めて、これを起動する訳にはいかない。拳銃も同様だ。とても素人の手に負える物じゃない。本番で失敗すれば殺される。最悪、自滅だ。

しかし それでも、生きて帰りたいのなら……この恐怖から逃げたいのなら。

「……やってやる」

敵が捜しに来る事も考えれば、準備する時間はそう無い。光熙は頭をフル回転させ、静まった暗闇に目を凝らしながら、生き残るための策を練り始めた。

雨は未だに激しく降り続けている。

光熙は準備を終え、玄関近くにある階段のふもとで止まっていた。気付かれないように、こっそりと顔を覗かせる。案の定、玄関付近にはあの死神が居た。まるで、何かを待ち構えているように……いや、間違い無く、獲物を待ち構えているのだろう。

光熙はここに来る前に、他に脱出できそうな場所が無いか考えを巡らせていた。しかし、生憎二階から飛び降りる勇気は無く、あの理科準備室から一階に移動しようにも、学校の構造上、この階段からしか下りられない。あの死神と対峙する事は、避けては通れない道だった。状況から察するに、？ゲーム？と言ったあの男の思惑通りに、事が運ばれたらしい。

「それなら……俺は」

光熙は決意を固め、遂にその足を踏み出した。

「ああ……ああ、ああ、ああ」

喜んでいる。死神は鎌を大きく掲げ、その身を標的へと向ける。

最初の一手。

光熙は、その左手に抱えた大きい包みを投げつける。中空へと投擲された箱　時限爆弾は、狙い通り死神の元へ。だが敵は動じる事もせず、向かってきた物体を真つ二つに引き裂いた。同時に黒い粉と、硝煙臭い匂いが辺りに充満する。

摩擦にも、衝撃にも反応を示さなかった火薬。

不発か。いや、それが光熙の狙いだった。

死神が黒い粉を警戒し、周りに気を取られている間に、続く二手。「うおおおおおお！」

すぐその床から、奇妙な液体の入ったビニール袋を掴み、勢いを付けながらその手を離す。山なりに投げられたビニール袋は、当然死神を目掛けて突撃する。また同じくその不気味な鎌は、露払いをするように大きく円を描く。

びしゃ、と液体が飛び散り、辺り一面を覆い尽くす。そしてまた、妙に鼻を突く臭気が充満する。

これで最後、と仕上げに黒い塊を液体へと放り投げる光熙は、ポケットに手をつ込み、何かを取り出す　その手には、マッチが握られていた。

死神は理解不能とでも言いたげに、その身を後ろに傾けながら、鎌を防御態勢で構える。

「「あ、……あ、」」

弱々しく唸る声は、もはや恐怖を感じさせない。

「勘付いたか……、けど」

光熙はマッチ棒に点火しながら、その勝ち誇った顔でこう宣言した。

「これで、ゲームクリアだ」

マッチ棒を落とした先には　導火線が引かれていた。

光熙は導火線に火が点火した事を確認した後、ハンカチを口元へと押し付ける。瞬間、水が蒸発するような音が一気に溢れ出し、暗闇の視界を煙で埋め尽くした。

それを合図に、光熙は全力で玄関を駆け抜け、外へと跳び出した。

その顔は、思わずニヤリと緩んでいた。

上手くいった。

雨風に打たれながら、その喜びを一心に噛み締める。

あの時、理科準備室で爆弾を手にした時、思いついた作戦。それは、煙幕。

この？ゲーム？に勝つ勝利条件は、逃げ切る事であって、敵を倒す事ではない。そこに気付いた光熙の頭には、ある考えが浮かぶ。もし、敵の視界を奪う事ができれば……楽に脱出する事が可能になるんじゃないのか？

そこからが、大変だった。急いで理科室を見渡し、慌てながらも目当ての材料を見つけ、すぐに仕掛けの作業に取り掛かる。しかしその間、身体中の痛みに耐え、不安定な心情を抑えつけるのは、決して楽ではなかった。

そして結果は 見事に大成功だった。

敵は思惑通り、あらかじめ導火線を付けておいた箱を壊し、導火線の道を作ってくれた。次に、ガソリンなどの液体入りビニール袋を破り捨ててくれた。そして、最後に投げた木炭は、液体の力とマッチ棒から発せられた火力を借りて、煙を急激に立ち昇らせる。お陰でこの通り、木炭煙幕を囿に逃げ出せた。

光熙の身体からは鳥肌が立ち、笑みは笑声に変わる。

「勝った……。俺は、逃げ切った。逃げ切ったんだ！」

生きているという実感。恐怖からの脱出。勝利への喜び。だが

「「あ、あ、……」」

耳に入る奇声に、失望感を覚えた。

光熙は疑いながらも、その目で敵を見つめる……。

浮上している黒い布。そこから覗く白い骨。そして、湾曲した大鎌。

間違い無く、死神だった。

「どうして、なんで……」

あり得る筈が無いと、光熙は途方に暮れつつも頭を働かせる。

あの死神は今現在、煙の中で彷徨っている筈。もし、俺以上のスピードで動き、先回りをしていたとしても、それなら後ろから不意を突けばいい筈だ……。

そこから導き出された結論は

「くそっ……。二段構えか」

何故、奇声は聞こえるのに、途中で死神に遭遇しなかったのか。

何故、玄関付近で死神は待機していたのか。

全て、納得がいった。

光熙は急いで懐に手を忍ばせ、残った最後の武器、拳銃を取り出す。

死神は驚く事も無く、ゆっくりとその鎌を上へ差し向ける。

見れば、後ろからもう一体、敵が迫っている。さっき対峙した奴だ。

「ああ、ああ、ああ、」

完全に、挟み撃ちの状態。逃げる隙も無く、手の内にある武器も使えない。八方塞の光熙にとって、最早打つ手は無かった。

「畜生……っ！」

もう震えさえ起きない。限界を超えた光熙の頭は、自己嫌悪で覆い尽くされ、拳銃をヤケクソに地面へと放り投げる。

計画はちゃんと立てた。作戦も上手くいった。けど、失敗した時の事を考えていなかった。敗北を前にして、逃げる事すら馬鹿馬鹿しく思った光熙は、膝からガクンと崩れ落ちた。

激しく打つ雨が、ずっしりと重く身体を叩きつける。

死神達は獲物のすぐ傍まで近寄り、勝利の雄叫びを上げる。

「ああ、ああ、ああ、」

小さき生命へ、明確な死が定めを振り下ろされる　その時、

「こっち！」

どこからか、か細い声が聞こえる　瞬間、眩い光が視界一面に現れた。反射的に瞼を閉じる。

「「あゝあゝ……あゝあゝあゝあゝ！」」

奇声が、苦を訴えるように悲鳴を上げる。

「何してやがる。早くこつち来いってんだ！ ほら！」

さつきとは違つ、凶太い声。光熙はその人物に襟を掴まれ、強引に引き摺られる。

一目その姿を見ようとと思った光熙は、無気力な筋肉を動かさず、首を曲げたが、この眩しい光のせいで、目を開けられない。

「あんた……は？」

せめて、名前だけでもと必死に口を動かす。すると、静かな返答。

「正義の味方だ。小童」

その声と共に、光熙は眠りに落ちた。

静寂と混乱と「口霊」と……（後書き）

part 1、これにて閉幕に御座います。

もちろん、part 1と付いているという事は、part 2もありますので、

完成次第掲載せようと思います。

もしよろしければ、評価の程をお教えいただけたらなあ……. と思っておりますので、どうか、よろしくお願いします。

なにぶん、まだまだ未熟な者で……. w

では、またノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6887n/>

～黄泉路の罪咎～

2010年10月8日14時20分発行